

# St. Luke's International University Repository

## 伝えたい看護実践の"智"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川嶋, みどり, Kawashima, Midori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00014947">https://doi.org/10.34414/00014947</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 伝えたい看護実践の“智”

川 嶋 み ど り<sup>1)</sup>

### はじめに

看護が職業として始まって100年余、その過程で先輩たちが行った実践の量は、計り知ることのできない豊富なものである。初期の教科書には、そうした経験をよりどころにした方法が記載され、今日に至ってなお、余り疑問にされぬまま定着しているものも少なくないと思われる。看護の科学化や、科学的根拠に基づいた実践ということへの関心の深まりのなかで、なぜ今、再び実践“智”なのだろう。そのことの意味を考えながら、50年以上看護師であり続けた私自身の経験をひもとき、看護学研究の仮説になりうる実践の“智”のいくつかを紹介し、そうした実践からの“智”を引き出す方法についても話してみようと思う。

### 1. なぜ、今、実践“智”なのか

#### 1) 看護における科学の立場と技術の立場の曖昧さの克服

看護学は若い学問である。それゆえに多くの可能性を秘めているともいえる。私は、技術論の立場から看護学の構築を考えてきた。看護は優れて実践的であるゆえだが、だからといって科学的な見方や考え方をないがしろにするものでは決してない。ところで、実践“智”について考えようとするれば、当然、その実践を構成する要素や実践から智の産出されるプロセスに目を向けなければならないだろう。

##### (1) 看護実践とは

一般に実践とは人間の自然や社会に対する働きかけ(活動)をさしている。私は、看護実践について、「看護師自身(主体)の身体的諸器官と、その延長である道具・器械・機械システムを用いて対象の身体、精神・心理、生活行動面のよりよい変化をめざして働きかける過程」とであると定義した<sup>1)</sup>。すなわち、実践を構成するのは、実践主体、実践対象、実践目標(変化)、過程の4つの要素であるといえ、これは看護に限らずすべての人間実践に共通である。

##### (2) 看護実践におけるカンやコツについて

言語によって共有されている知識は、研究という過程を経たものばかりではない。実践を通して生まれる知の豊富さにも目を向ける必要がある。何らかの働きかけに

よって、めざしていた変化が得られたとすれば、それは、変化獲得(目標達成)に有効な合法則活動によるものである。すなわち、①主観的法則性の意識的適用と、②客観的法則性の意識的適用の何れかによって得られたのである。前者がいわゆるカンやコツ、すなわち技能と呼ばれ個人の身体知として保存される。言語化されてはいないが、看護実践“智”を構成するひとつであることは間違いない。

##### (3) 看護技術とは

看護技術は、「看護実践における客観的法則性の意識的適用」であり、「行為を可能にする原理」であるという点からも、言語化され知識として教育可能である。ただし、この客観的法則性は必ずしも、科学をさしているわけではない。科学には至らないが、「こうすればこうなる」という、過程と結果との間の因果関係を把握したもの、すなわち経験則をも含む。やがて、この経験則が仮説となって科学的な研究へと発展することは大いにあることである。この考え方は、武谷三男(1911~2000)の技術の「適用説」<sup>2)</sup>によっている。

##### (4) 経験のもつ意味について

現在のところ看護の「智」に含まれる「知」には、すでに科学的に明らかになった知よりも、むしろ先輩たちの築き上げてきた経験の知のほうが多いのではないかと思われる。経験とは何かについて、中村は「人間が感覚や内省を通じて得るもの、及び、その獲得の過程」<sup>3)</sup>という。また、山田は経験の意味について「なぜそうなるかは、いまの科学論では分からない。しかし経験的にみてこういえるとなったとき、いったいそれはどうしてだろうと、新しい科学的探求が始まってゆく。科学の網の目から洩れたものを技術はつかんでゆく経験によってつかんでゆく。技術に真の創造性を与えるもの、それが経験である」<sup>4)</sup>と述べている。

### 2. 実践“智”を伝えるために

#### 1) 看護技術教育と実践“智”

看護実践能力の向上を図ることは、基礎・現任教育共通の課題でもある。基礎教育に限ってみても、口では実践が大切といいながら、「知る」ことを最大の価値として、「できる」ことへの価値づけが弱いとはいえないだろうか。臨地実習のあり様を含めて再考するのを感じている。前述の技術と技能の考え方からしても、教室で教えることができるのは、言語化された知識としての

1) 日本赤十字看護大学、健和会臨床看護学研究所

「技術」である。しかし、知識として知ったからといって、直ちにできるとは限らない。一定のトレーニングを重ね身についたわざ（技能）になってはじめて「できる」レベルのわざになる。こうしてみると、臨地実習における技能訓練の技術化は、喫緊の課題であるといえよう。

## 2) 先輩たちの実践のナラティブスからの学び

私が看護の道を歩み始めた頃は、現在では想像もつかない貧しい環境であった。そうした条件下で、どのように実践能力やアセスメント能力が身についたのだろうか。

### (1) 食欲不振患者へのきっかけ食

衰弱や重症で食欲のない場合、一口でも何かが食べられれば、闘病意欲に通じると先輩はその経験を語った。ごく少量でもいい、何かが摂取できれば、それがきっかけになってその後の食欲に通じると言い、「お袋の味」や、季節の彩りを加味した食膳の工夫を語った。後日、これをヒントにして食事援助をして奏功した事例からきっかけ食と命名した。

### (2) 術後の苦痛緩和のバックケア

入浴と同様の心身の爽快感をもたらす全身清拭の方法を検討する途上で聞いた先輩からの語りは、その後熱布清拭という名で普及された方法である。さらに、バックケアを通して、腰背部の温熱刺激が腸蠕動を促す有用な方法であるとして、その根拠を探る研究の仮説<sup>5)</sup>にも発展した。

### (3) 新人時代の実践が看護の“智”の根拠に

3年間を通して5,000余時間の実習を課せられた。そのことの良否はともかく、新人として就職して10日も

経たない頃の、重症少女への清拭によって得られた劇的な変化が、看護技術における重要な柱としての「安全と安楽」の概念に結びつき、生活行動の援助そのものが、苦痛緩和や闘病意欲の向上につながる看護独自の方法となりうることへの確信となって今日に至っている。

## 3. 実践“智”を伝えるとともに、実践“智”を創ることを伝えたい

智を伝えるためには、個々の看護師らが身体知としてある経験を、言葉で表出することから始めなければならぬだろう。また、語ることでできる内容をもつ実践は、その量を増やし質を高めることによって意識化されることを考えると、よりよい実践を阻む諸々を主体的に明らかにしなければならない。“智”を伝えるとともに、“智”を創り出すことを、多くの看護師らに伝えたいと思う。

## 引用文献

- 1) 川島みどり, 看護観察と判断, 19-20, 看護の科学社, 1988.
- 2) 武谷三男, 弁証法の諸問題, 139, 勁草書房, 1968.
- 3) 中村雄二郎, 臨床の知とは何か, 岩波新書, 1992.
- 4) 山田慶児, 科学と技術のはざま: 看護技術論, 60, メヂカルフレンド社, 1977.
- 5) 川島みどり, 排便・排ガスの技術-腰背部温罨法, ナーシングトゥデイ, 9(4), 8-11, 1994.